

蔵書に込められた先人の感性 ～図書館と景観研究～

理工学部 社会環境工学科 教授 岡田 昌彰

「近畿大学図書館の蔵書は量・質ともに驚異的だ。これを活用せずに卒業してはいけない！」

「大学生活の醍醐味は友達を作ることだが、図書館とも早く友達になろう！」

年度初め、筆者が新入生諸君に毎年伝えるメッセージである。研究室に配属したばかりのゼミ生、あるいは学問の世界に一步足を踏み入れた卒論生や大学院生たちにもこの言葉を頻繁に投げかけている。これは決して誇張でも、あるいは愛学心向上を図る口上でもない。学問の真骨頂である「知の探究」の成立条件は「知の泉」をもつことである。それが身近に獲得できればまさに自己発展の好機となる。最も大切なことは、その好機の存在に気づき、逃すことなくそれを確実に自身の手で掴み取ることだ。

ところで、筆者が専門とする景観の研究分野は多岐に渡る。デザイン論や計画論などの実務論に加え、プラス・マイナス（ときにニュートラルまたは埋没）の評価、あるいは芸術的景観としての解釈、地域社会が認める原風景としての位置づけなど原論的なものも含まれる。これに構造物の形を決定する要因としての力学的な成り立ちや建設効率など（狭義の）工学的要素が加わる。景観はまさに、人文社会学、自然科学、及び工学が融合する学問と言えるだろう。

実際、筆者の所属する土木工学（社会環境工学）に加え、建築学、造園学、観光学、古くは地理学、そして最近では考古学や歴史学においても景観が議論されている。講演会などで筆者とともに登壇するスペシャリストたち



テラススケープ
図1 価値づけられる産業景観
上) 工場夜景ツアー（大阪府高石市）
下) 万田坑（熊本県荒尾市）

の専門領域はまさにこのバラエティを如実に反映している。近年は法整備も充実し、行政の景観審議会には法律家や弁護士までもが肩を並べる。さまざまな知的体系を載せることのできる学際的プラットフォームとしても景観学には大きな魅力と可能性が感じられる。該博な学者も少なくない。

ところで、筆者は現在まで主に工業都市を対象とした景観研究を続けている。都市開発史や企業による都市経営の軌跡、産業立地によって構築された工業都市特有の、ときに優美でさえある合理的な社会基盤、そこに育まれた民謡や特産品など豊かで個性的な地域文化。これらの集合体が、工場や鉱山、物流施

設などの形成する産業景観テクノスケープに反映されているのが魅力だ。最近でこそ三重県四日市市や大阪府高石市など全国の工業都市において工場夜景が観光対象となったり、あるいは熊本県荒尾市の万田坑（世界遺産）や兵庫県朝来市の生野銀山（重要文化的景観）をはじめとする産業遺産のブランド化と活用が文化財行政あるいは都市づくりの場で検討されることも多くなった（図1）。しかし、実際このジャンルは未だ発展途上にある。国内で産業景観そのものに文化的価値を見出す考え方はその多くが表層的であるし、景観施策の中でも議論の俎上に挙がることはきわめて稀である。社会がまだ十分に気づいていない価値を探求するからこそ研究は面白いと言えればそれまでだが、今は傍流と呼ばざるを得ない我が道がいつか時流の1つを形づくりと信じ続けながら研究に邁進することはまるで孤高の道を漂流するような感覚を伴う。それだけに、先人の残した足跡や試行錯誤の記録に触れることは時に大きな勇気となる。自身が綿密な現地観察によって得た現景観の一次情報に先人の思想や思考過程がわずかながらも重なることで、孤高の道の先には透徹した一筋の線が霞んで見えてくる。「やはりこの先には何かある。」前進のモチベーションはふたたび高まるのだ。

このような景観研究の醍醐味を下支えしてくれているのが、本学図書館の豊富な文献の数々である。これまで筆者が収めてきた研究

成果において本学図書館の蔵書は必要条件とさえ言えるほどの大きな役割を果たし続けている。ときに運命的とさえ思えるような貴重な文献との出会いもあった。鉄道会社、電力会社にセメント生産会社、物流会社など多岐にわたる企業の社史、あるいは「昭和の大合併」で消滅した数多の旧自治体をも含む日本全国の都道府県市町村史などに加え、戦前の激動期に実業家が著した論考、英文学者がなぜか民藝運動に没頭した時期に著した昭和初期の著書など、枚挙に遑がない。石灰石鉱業都市の景観を考究した拙著「日本の砒都」（創元社、2017年）においても、本学図書館の蔵書は大きな力を発揮してくれた。例えば、行政史料では山口県の秋芳町史（1963年発刊）、宇部市史通史篇（1966）、小野田市史（1962）、北海道の南富良野村史（1960）、愛知県田原市の田原史（1935）など、さまざまな時代のものが全国くまなくほぼ網羅的に収集・所蔵されている。さらにセメント工業関連の社史では、戦前に発刊された浅野セメント沿革史（1940）のほか、小野田セメント創立七十年史（1952）、日本セメント株式会社七十年史（1955）、現在のデンカ株式会社の前身企業である電気化学工業株式会社三十五年史（1952）など、貴重な情報を含む数多くの文献たちが研究を成功に導いてくれたのだ。

無論これらの図書たちとの出会いは研究者にとって知の発見と大きな喜びの連続である



図2 黒谷和紙組合（1967）「黒谷の紙」（近畿大学中央図書館蔵書）
左）特徴的な装丁 右）製本されている和紙と原料のサンプル

が、その度にやや謎めいたものも感ぜざるを得ない。この図書は近畿大学百年の歴史の中で、一体どのような人材(図書館の司書?)が、どのような目的で収集してくれた文献なのか。そのような問いというか、筆者自身との対話を喚起するような図書にも何度か巡り合った。

例えば、「黒谷の紙」という図書が本学図書館の蔵書にある(図2)。昭和42(1967)年に京都府綾部市の黒谷和紙組合によって出版されたものだが、本文56ページ全てが和紙で製作された限定200部の「手作りの本」である。その後ろ111ページにわたる「付録」には、多種多様の精美な和紙と楮・三桮・雁皮など原料サンプルまでもが製本されている。紙の製法を紙に印刷し、紙の成果物サンプルとともにその原料をも折丁した紙の本。このような“神(紙)業的”な本づくりの特権をもつ産業は業界でただ1つ、「製紙業」のみである。



図3 綾部市黒谷の和紙集落

この本が紙とともに製作された黒谷集落は、丹後から京都に至る街道筋に形成された全国有数の「和紙の里」だ(図3)。一説には12世紀末頃に平家の落武者たちが当地に移り住んだと言われているが、以来集落内に自生する楮と黒谷川の清冽な水を利用して和紙が生産され続けてきた。江戸中期の寛政期(18世紀末～19世紀初)には紙漉き技術に大きな改良が図られ、約60km離れた京都市中心部へも販売されるようになる。戦後、昭和30年代に入ると日本全国に洋紙が本格的に普及したのに伴い各地で和紙生産は衰退・廃業していくが、黒谷和紙は民芸品として再評価され現在もその生産が存続している。この本を出版した黒谷和紙組合は、製品の品質向上などを目的として明治41(1908)年に結成された歴史的な組織である。

調査を進める中で、この集落で戦後、興味深い「手作りの本」が3冊製作されていることがわかった。そのうち1冊が上述の「黒谷の紙」、もう1冊がその3年後に出版された中村元著「紙すき村黒谷」(昭和45(1970)年/限定250部:図4)、そして3冊目が黒谷和紙保存会による「紙すき村の人たち」(昭和58(1983)年/限定50部)である。これら3冊はいずれも全ページが和紙で製作されているが、全128ページからなる「紙すき村黒谷」には和紙づくりの作業工程などがユニークな挿絵によって説明されている。これは地元の



図4 中村元(1970)「紙すき村黒谷」黒谷和紙組合
左)特徴的な装丁(筆者個人蔵) 右)黒谷和紙会館における展示

挿絵家、金山ちづ子氏によるもので、1枚1枚手で型染めのうえ製作されたという。限定250部とはいえ、1冊あたり50点近くに及ぶ挿絵の数と質を思えばこれだけでも気の遠くなるような膨大な作業ではないだろうか。無論、全てのページに用いられている和紙そのものが職人の紙漉きなる丁寧な手作業によって漉かれたものであることも忘れてはならない。この極上の「手作り本」は、1972年にドイツで開催された世界の図書展で「世界で最も美しい本」としてグランプリを獲得、一躍有名となった。この本は展示館を併設した黒谷和紙会館にも展示されている（図4右）。

“世界一美しい本”を初めて手に取ったときの感動は今も忘れがたい。栄誉あるブランドを獲得した「紙すき村黒谷」には、記録されている情報の価値に加え、和紙の民芸品としての大きな付加価値が確かに感じられる。一方、本学蔵書にある「黒谷の紙」も決してそれに引けを取っていない。記載情報の学術的価値のみならず、装丁の秀逸さも両者ともに全く同等であるし、活字や写真などの掲載内容はいかにも現代的ではあるも和紙の完成品と原料サンプルを束ねた「黒谷の紙」もまたれっきとした和紙の民芸品に他ならないだろう。限定200部と発刊年（1967年）はいずれも“世界一美しい本”のそれぞれ限定250部、1970年を凌駕しており、同等あるいはそれ以上に貴重であるとも言える。挿絵の美麗さを差し引いたとしても、世界の図書展で仮にこちらが出品されていれば相当の高評価を獲得しても不思議ではなかったのではないだろうか。“世界一美しい本”は残念ながら本学蔵書には無い（全国の大学図書館約1300館中わずか9館所蔵）が、「世界の図書展」の5年も前に製作された「黒谷の紙」が近畿大学第12書庫に置かれていることは特筆に値するだろう。（ちなみにこの図書は全国約1300館中わずか14館所蔵）できることなら、約半世紀前にこの図書を収集された当時の図書館職員の眼力と感性に心から深い敬意と謝意を伝えたいところである。それにしても一体どのような人

材が、何を目指してこれほどの図書を当時収集されたのだろうか？———ちょうど今から20年前、その答えの片鱗を垣間見る機会があった。

筆者が本学に赴任して間もない平成15（2003）年、高校訪問の際にベテラン職員の方2名とともに京都府内の高校を回った。道中お二方から本学の歴史などについて楽しいお話をいろいろ伺ったが、その中で筆者が当時既に感じ始めていた図書館蔵書の充実ぶりについて話が及んだ。ベテラン職員の方が先輩の職員（あるいはその職員のさらに先輩の職員？）から昔聞かれた話によれば、戦後の本学図書館員は「きっといつか役に立つ日が来るだろう」との信念のもと、社史や市史、美術本などを積極的に購入されていた時期があったというのだ。時には図書館職員たちがこぞって古本屋街を歩き回り、目についた良書を収集することもあったとのこと。いわば「本の目利き」とも呼べるような先人たちの尽力によって収集された蔵書には、今やその現代的価値が認められ貴重本となっているものも実際少なくない。そしてこれらの一部が入荷から半世紀以上の時空を超えて筆者の手元にたどり着き、世界でまだ誰も注目されていないような重要な歴史的メッセージを雄弁に語ってくれているのだ。まさに、みょうじゅうたなごころにあり明珠在掌。この宝は大学図書館という自らの掌に易々と届くほどの距離に眠り続けていたのである。

優れた付属図書館の存在は本学のブランドの1つにも十分になり得るだろう。そしてそれを結実させた先人の感性と眼力、図書収集に対する情熱は今後の本学図書館にも受け継がれていくことを信じている。本学学生はもちろん、我々教職員もそのポテンシャルを深く認識し積極的に活用すべきである。先人の思いのこもった数々の図書たちが、我々の手に取られることを今日も書架の片隅でじっと待ち続けているのかも知れない。

【参考文献】

- 岡田昌彰（2003）「テクノスケープ～同化と異化の景観論」, 鹿島出版会
- 岡田昌彰（2017）「日本の砦都～石灰石が生んだ産業景観」, 創元社
- 黒谷和紙組合（1967）「黒谷の紙」
- 中村元（1970）「紙すき村黒谷」, 黒谷和紙組合
- 綾部市史編纂委員会（1976）「綾部市史上巻」
- 綾部市史編纂委員会（1979）「綾部市史下巻」
- 黒谷和紙ウェブサイト
<https://kurotaniwashi.kyoto/about/>（2023年11月現在）